

林外務大臣の日印フォーラムでの挨拶（仮訳）

1 冒頭

ナマスカル、おはようございます。インドラニ・バグチ・アナンターセンターCEO、御紹介いただきありがとうございます。また、ジャイシャンカル大臣におかれても、ご丁寧なもてなしに感謝いたします。

本日は、日印関係にとって重要である印日フォーラムで講演する機会を賜り、大変光栄に思います。

2023年は日印両国がそれぞれG7・G20議長国を務める重要な年です。3月の岸田総理の訪印の際には、両首脳間で緊密に連携していくことで一致しました。その後すぐに、5月のG7広島サミットでモディ首相をお迎えすることができました。

外務大臣に就任して以来、私自身、ジャイシャンカル大臣との間では、緊密かつ個人的な形で共に任務に取り組んでくることができました。我々はこれまで、東京、ニューデリー、ニューヨーク、メルボルンといった都市で、6回にわたり会談の開催や同席の形で会ってきています。また、この回数には、国際会議で顔を合わせる機会はありません。私はジャイシャンカル大臣を偉大な戦略家として賞賛していますが、彼は私の度重なるビートルズジョークに毎回笑ってくれる寛大さも持ち合わせてらっしゃるため、いつも彼とのやり取りを楽しんでいます。ジャイシャンカル大臣、この場では是非お手柔らかに、厳しいコメントや質問は2人だけのやり取りの際にとっておいていただければと思います。

本日は、皆様に二つの重要な点をお伝えしたいと思います。一つは、いかにしてG7広島サミットの成果をG20ニューデリー・サミッ

トに繋げるか、についてです。二つ目は、岸田総理が3月にこの地で発表した「自由で開かれたインド太平洋」のための新たなプランも踏まえ、今後いかにして日印関係をさらに発展させるか、についてです。

2 G7広島サミットからG20ニューデリー・サミットに向けて

それでは一点目に移らせていただきます。G7広島サミットは、歴史の転換期において、世界が直面している様々な課題に取り組む歴史的なものでした。

G7を超えたパートナーへの関与の重要性について提起させていただきます。開発途上国や新興国が国際社会でその存在感を高めている中、日本はG7議長国として、いわゆるグローバル・サウスへの関与の強化をG7広島サミットで重視しました。これは、グローバル・サウスの声に真摯に耳を傾け、これらの国々が直面する喫緊の課題に対する協力へのコミットメントを示さなければ、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序を守り抜くとの訴えも空虚なものになりかねないという思いに基づくものです。3月に行われたG20外相会合の際に、モディ首相もグローバル・サウスに発言の機会が与えられることの重要性を強調しました。

G7広島サミットでは、インドを含む8つの招待国を招いて議論を行い、多くの具体的な成果を得ました。特に、G7及び招待国の首脳は、食料、開発、保健、エネルギー・気候変動、環境などのグローバルな課題に関する協力を強化することを確認しました。これらの課題は、G7だけで解決することはできません。また、持続可能な開発目標(SDGs)達成に向けた力強いコミットメントも再確認しました。ロシアによるウクライナ侵略の影響で悪化している食料安全保障に関しては、G7と招待国が共同で、「強靱なグローバル食料安全保障に関する広島行動声明」を発出しました。

こうした課題への取組においては、グローバル・サウスの中でも国際社会で影響力の大きい国が集まるG20は特に重要です。1月に「グローバル・サウス・サミット」を開催したG20議長国であるインドとの連携は極めて重要です。G7広島サミットでは、モディ首相から差し迫ったグローバルな課題への対処について具体的な取組の呼びかけがありましたが、これらはG7サミットの成果と軌を一にするものであり、日本はインドの様々なイニシアチブを支持していることを強調しておきたいと思えます。この場をお借りして、広島でのサミットの成功に向けたモディ首相の貴重なインプットに感謝申し上げます。

日本が考えるG20議長国たるインドとの協力について、更に、具体的な例をいくつか紹介させてください。環境に関しては、モディ首相が打ち出したLiFE（環境のためのライフスタイル）というコンセプトは、すべての人に地球と調和した生活を送ることを課しており、これは日本の政策とも共鳴する考え方です。日本もまた、脱炭素を目指した行動変容を促す一環として、いくつかの取組を行っています。このことは、国民のライフスタイル変革が脱炭素の鍵となるという日印間の共通認識を示しています。

もう一つここで強調させていただきたいグローバルな課題は、食料安全保障です。我々は「雑穀とその他の古代穀物国際研究イニシアチブ（MAHARISHI）」の立ち上げなど、強靱で持続可能な農業と食料システムの構築に関する取組を進めるインドのリーダーシップを称賛します。我々は、インドのこのような取組が「強靱なグローバル食料安全保障に関する広島行動声明」に盛り込まれるよう努めました。

これらは、我々の多面的かつ広範な協力関係のほんの一部に過ぎません。日本は、G20ニューデリー・サミットの成功に向けて、引き

続きインドと手を携えて協力し続けることを強く望んでいます。

3 インド太平洋の未来に向けた日印協力

G7広島サミットで日本が重視したもう一つの点は、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の堅持です。G7、インドを含む招待国、ウクライナの首脳間で、世界の平和と安定につき議論し、力による一方的な現状変更の試みは世界のどこであっても許されないということに一致しました。さらに、法の支配や国連憲章の諸原則の重要性についても一致しました。

ロシアによるウクライナ侵略等を含む喫緊の課題が多い中、日本とインドは、世界を分断や対立ではなく協調に導く必要性を十分に共有しています。そのような世界を実現するためにも、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序は鍵となります。

この概念についてより詳しくご説明すると、「自由」とは、全ての国が、自らの主権に基づいて自由に意思決定できることを意味します。各国がそのような自由を享受するためには、法の支配が不可欠です。「開かれた」とは、包摂性、開放性、多様性といった理念の尊重を意味します。価値観の押しつけや、特定の国を排除しないことが肝要です。

この概念は、特に小国にとって極めて重要です。インドとも連携し、こうした考え方を「自由で開かれたインド太平洋」を実現する中で具体化していきたいと考えます。

本年3月、岸田総理はここニューデリーで、「自由で開かれたインド太平洋」のための新たなプランを発表しました。このこと自体、日本がインドを非常に重視していることの表れであり、貴国は「自由で開かれたインド太平洋」を実現するために不可欠なパートナーです。

さらに、自由で開かれたインド太平洋の実現に向けた取組はインドとの協力にとどまらず、南アジア地域全体に広がっています。新たなプランは、南アジアが重要な地域の一つであることを明確にし、具体的な取組を進めています。

4月には、バングラデシュからハシナ首相を日本にお迎えし、FOIPに向けた協力を推進することで一致しました。岸田総理は、ベンガル湾全体の連結性向上を目指す産業バリューチェーン構想について説明し、「ベンガル湾産業地帯（BIG-B）」構想の下で取組とインド北東部地域の開発を有機的に結びつけ、相乗効果を生み出したいとの考えを示しました。この点、インド北東部地域に関しては、モディ首相自身が優先課題とされていると理解しており、日本は「日印アクト・イースト・フォーラム」などの枠組みも通じ、同地域の開発を支援しています。今後も同地域の連結性を高めるため、北東州道路網連結性改善計画などのプロジェクトの推進を含め、インドの北東部地域の発展に貢献していきます。

私は今週末、スリランカとモルディブを訪問します。そこで私は、日本とこれらの国々との具体的な協力も促進する考えです。それにより、この地域全体でシナジーを生み出すことができると信じています。

それでは、インドとの二国間関係に話を戻しましょう。ここでジャイシャンカル大臣の著書「インド外交の流儀」を引用させていただきますが、日印関係を「アジアで最も自然な戦略的關係」と表現しています。私としてもこのジャイシャンカル大臣の立場と完全に一致しており、日印間の緊密な連携がインド太平洋全体に平和と安定をもたらす鍵となると考えています。その意味で、日本はインドとの「特別戦略的グローバル・パートナーシップ」を発展させるべく、あらゆる

る分野での協力を推進していく考えです。

詳しく説明させていただきます。

ハイレベルでの頻繁かつ重層的なやり取りは、日印関係のバックボーンとなってきました。ハイレベルの交流は、両国の安全保障・防衛協力を推進する原動力となってきました。我々は、1月に行われた初となる戦闘機の共同訓練を含め、陸・海・空いずれの部隊との間でも共同訓練を実施しています。このような訓練の際には、日・インド物品役務相互提供協定（ACSA）も活用されています。宇宙やサイバ一分野を含む新たな領域における協力も進展が見られ、実務レベルの協議が行われています。さらに、防衛装備品や技術協力の分野でも、実質的な協力の実現に向けた議論が進められています。

経済分野での協力関係の見通しは明るいものです。モディ首相は経済成長を最重要課題の一つに掲げており、メイク・イン・インド、デジタル・インド、クリーン・インド等の様々な経済イニシアチブを推進してきています。モディ首相は投資振興策として、通信機器や自動車、応用化学電池等、補助金の対象となる主要15分野を特定しました。こうした取組は、医療機器、電子機器及び家電を含む重要な技術に対する日本の投資の著しい成長に繋がっています。

このような動きも踏まえ、我々は日系企業による対印投資を後押ししてきています。例えば、昨年岸田総理は、5年間で5兆円の官民投融資の目標を打ち出しました。同時に、インド政府とともに、日系企業がインド市場で直面する課題に効果的に対処していく考えです。

日本は先月、我が国の開発協力に関する基本文書である開発協力大綱を改定したばかりです。この新たな大綱は、我が国が、食料やエネルギー、気候変動、デジタルなどの課題により良い形で対応するこ

とを可能とするものです。この改定された大綱の下で、引き続き我々はインドにおける高速鉄道、都市交通などの質高インフラの推進にも取り組んでいきます。

ここで少し、日印の「旗艦プロジェクト」である高速鉄道建設事業についてご説明させていただきます。この事業は日本の新幹線の技術を導入し、ムンバイからアーメダバード間約500キロメートルを繋ぐものであり、交通ネットワークの効率化や鉄道沿いの地域の経済開発の促進に寄与することが期待されています。我々は、この高速鉄道の完成により、インドが更なる経済成長を遂げていくことを期待しています。

我々の二国間関係の幅と奥行きを広げるためには、人的交流の促進が極めて重要です。今やポスト・コロナと言える中で、様々な交流を活性化させる好機です。両首脳は3月の首脳会談において、さらなる交流の促進に合意しました。我々は、2023年度を「日印観光交流年」に指定し、観光を促進していきます。さらに日印両国は、日本語教育、学生交流、特定技能制度も推進していきます。インドからのIT人材を含む人材の日本での活用についても協力していきます。

最後になりましたが、我々は国際機関や多国間の枠組みを通じた協力も続けていきます。国連安保理改革において具体的成果を得るべく、インドは我々にとって不可欠なパートナーであり、G4の一員として肩を並べて取り組んできました。また、日米豪印（クアッド）を通じて、幅広い分野で実践的な協力を推進してきました。

4 結語

最後に、いくつかG7広島サミットでの印象的な場面を振り返りたいと思います。インドは、マハトマ・ガンディーの胸像を広島市に贈りました。モディ首相及び松井広島市長は、自ら除幕式に出席され

ました。このことは、日本のメディアでも大きく取り上げられました。この贈り物はまさに、日本とインドが平和への歩みにおいて一致していることの象徴です。また、世界の首脳は平和記念資料館を訪れ、被爆の実相に触れました。首脳たちは記帳を行い、「核兵器のない世界」の実現に向けた思いを新たにしました。モディ首相はその後、この訪問について、「感情をかき立てられる体験」と表現しました。

日本は、G20ニューデリー・サミットの成功に向けて完全にコミットしています。インドのG20議長国としてのテーマは、「ヴァスダイヴァ・クトゥンバカム」、すなわち「一つの地球、一つの家族、一つの未来」です。モディ首相はこのテーマについての説明の中で、ゼロサム思考からの脱却を促し、人類および地球との調和を呼びかけました。G20サミットのテーマは、分断と対立が深まる今の時代において、協調を目指す日本のFOIPとも合致しています。

我々は、この地域そして国際社会のより良い未来のため、調和と協調の精神で、引き続きインドと共に取り組んでいくことを楽しみにしています。

ご清聴ありがとうございました。ダンニャバード。